はそれを知らずに、兄や私の帰りを待ちこがれつつ、昭和十八年に亡くなってしまったわけです。私も、母の恩に報いることも出来ず、看病すらもできず、母が亡くなったことさえ知らずに戦地勤務をしていたわけです。

私は今でも、母のことが常に思い出されるんですが、苦しみや淋しさを耐えて不幸な一生を終わった母が可愛そうでなりません。戦争が無かったら、母をいたわり、孝行も出来たでしょうし、母も、もっと長生きして余生を楽に暮らさせることが出来たと、悔やまれてなりません。

若い憲兵の中国での終戦前後

岐阜県 岸 欣一

私は大正十四年二月生まれです。十三年生まれと一緒に徴兵検査（昭和十九年徴集者は十三、十四年生まれ二か年分で、現役兵約一四〇万人が検査を受け、一〇〇万人近くが現役として入営した）で甲種合格、十九年十二

月五日に岐阜の歩兵六十八連隊留守隊に入営しました。

十二月十五日、警兵团（独立歩兵第六旅団）に転属し、下関から船で釜山へ、朝鮮半島―山海関―浦口まで列車ですが、貨車の中は暖房がきいて暑かった。天津駅について裸で出たぐらい、しかし、プラットホームは雪と氷でツルツルだった。浦口から船で揚子江を渡って南京へ、さらに安徽省無湖についたが、私は第一中隊配属で荻港という所でした。一期の教育検閲をすませぬうち、中隊長から呼び出され、希望したわけではないが、他二人とともに憲兵の試験を安慶で受けました。中隊へ帰り軽機関銃射手として教育を受けている時、大隊から三人の合格、私もその中に入っていました。

私は独立歩兵第二一大隊本部のある銅陵へ戻って、南京鐘山下士官候補憲兵学校の隣五台山の教育隊へ三月末入校しました。教育中は捕縄術で褒められたり、毎日遅くまで勉強していて、知らず知らずに居眠りしていて、どえらく吐られそうになったりで、だんだんと教育され、今でも修業時の記念写真を持っています。

修業と同時に九江憲兵隊本部に配属されてから、大治

鉄山分遣隊勤務となりました。ここは八幡製鉄との関係があり、沢山の邦人がおり、奥さん達が歓迎してくれ喜んだのですが、中へ入ったら留置所監視ばかりで、九江本部へ戻るまで外へは出られませんでした。

二十年八月一日、上等兵を拝命し、次の日に南昌憲兵分隊へ回されて、さらに安義分遣隊へ、そこで初めて憲兵としての勤務をしたのです。街を一人で巡った時、銃声がしたので跳んで行ったら（兵隊が暴発し誤って銃を発砲）、みすばらしい服装をした少尉が頭を下げて「頼む」と謝るのです。上衣は軍服だが、下は全部支那服、本場にこれが日本の軍人かと疑うようなものです。奥地の方で補給もなく戦って歩いてきて、上海の方へ行く部隊なのです。

部下の暴発を穏便に見逃すようにということでした。憲兵上等兵だから将校は調べられないのです。兵隊のことも独断では許せないのですが、少尉のみすばらしい格好や、奥地での苦勞を思い、その場で許しました。

その次に入ってきたのは幸兵団（第三師団）で岐阜の第六十八連隊所屬の部隊です。私は「益田郡の兵隊はい

ないか」と叫んで捜したのですが、私の親戚のものは後からくるとのことでした。しかし、私はその日からマラリヤで発熱し、とうとう会うことができませんでした。

八月十日ごろ、南昌の憲兵隊に入り、宮野憲兵隊長の当番兵となりました。十五日朝、隊の前に整列して、陛下の玉音放送を聞いたのですが、自分達は敗戦を聞き取れませんでした。

私たちは分からなくても、中国人は新聞もないのに敗戦を知っていました。私たちはそれから呉城鎮へ出発したのでしたが、途中、中国人が石をぶつけてきた。今まで、シーサン（先生）、シーサンと言っていたが、手の平を返すような仕打ちに腹をたてたが、どうしようもなかったのです。

呉城鎮で武装解除となり、小銃の菊花紋章をやすりで削ったのはこの部隊も同じです。それからは軍の憲兵隊司令部から離れて、独歩第七旅団（征兵団）の指揮下に入り、昭和二十一年六月まで蟠陽湖のそばの呉城鎮にいました。

憲兵の下士官は有名な廬山を越えて湖口へ、私は隊長

の当番で船で上海の第二戦犯管理所まで行きました。それから中国軍が大目に見てくれたのか、使役（労働）は全くありませんでした。

八月下旬ごろか、中国軍の収容所長（少将ぐらいか）が戦犯容疑者を全員呼び出して訓示をしました。それは、君達に寛大な処置をするというものでした。私は上等兵だったので九月十日ごろ収容所を出て、上海から海防艦で佐世保入港、家に帰ったのは十二日ごろだったと記憶しています。

憲兵の軍曹以上は全員戦犯容疑で残されたのですが、私は収容所で手伝いをしていたので帰還が遅れたのです。憲兵でもひどい目に会った人、優遇・寛大にされた人とさまざまでしたが、私は第七旅団長生田寅雄少将から過分の感謝状を頂き、帰国時は感謝状や記念写真等検査もなく、衣服等も持って帰還できました。

憲兵は相当睨まれていたり、軍人はかりでなく、現地治安、情報収集などのため諜報活動した人もおり、岐阜県の人でも戦争犯罪人となることを恐れて自殺したり、病人と偽り、船で揚子江を下ろうとして見つかり、逮捕

された人もいました。

私は幸運にも、むしろ感謝されながら復員できましたし、持ち帰った写真をもとに戦友を捜して、戦友会の発起人となって、もう十一回開催しています。何事も一生懸命真面目にやるという信条は軍隊で築かれたものでした。

湘桂作戦舟を曳いて溯る

愛知県 石井 孝

私は大正十年生まれですから、昭和十六年徴集ということになるのだが、昭和十七年八月、福岡の西部四十六部隊、今の平和台球場の所ですが、八月補充兵として入隊しました。教育を受けずに直ぐ出発です。

船に乗って何処へ行くか判らん。海の水が濁っておれば支那に行くんだという。海と河との間が泥水だわ、そこは珠江で、河を遡っていく。廣東に着いて、本部は東山という所であって、東山から西村という所の野戦倉庫